

アレキシサイミア傾向と攻撃性の関連¹⁾

The Relationship between Alexithymia and Aggression

姉小路 園生

Sonoo ANEKOUJI

東京家政大学文学研究科
Graduate School of Letters,
Tokyo Kasei University

越 智 啓 太

Keita OCHI

東京家政大学
Tokyo Kasei University

問 題

アレキシサイミア傾向とは、Sifneos が心身症の患者に典型的に見られる心理的特性として提唱した概念であり、自分自身の感情を適切な言葉を使って表現することができないことを中心とする一連の特性群のことである。これ以外に、自分の感情の認識が困難であること、自己の感情と情動喚起に伴う身体感覚を区別できないこと、空想力が乏しいこと、思考スタイルが機械的で操作的であることなどの特性を含んでいる (Sifneos, 1996)。

さて、従来から、アレキシサイミア傾向は攻撃性と関係があるのではないかという指摘がなされてきた。アレキシサイミア傾向は高血圧傾向やタイプ A 傾向と関連することが示されているが、これらの傾向は、攻撃性や怒りやすさと密接に関連しており、それゆえ、アレキシサイミア傾向と攻撃性の間にも直接関係があるのではないかというのである (Taylor, Bagby & Parker, 1997)。

また、アレキシサイミア傾向の高い人は、自らの感情状態を正確に認知することが出来ず、生じた感情に適切に対応出来ない。そのため、攻撃などの衝動的な行動をとる場合がある (Fahy & Eisler, 1993) という経路や、我々は普通、不快感情を感じると、空想や夢、遊びなどを通じてそれを解消するが、アレキシサイミア傾向が高いとこのような能力が阻害されているために、蓄積した不快感情が解消されず (Grotstein, 1986)、結果として、衝動的な攻撃を引き起こしてしまう (Berkowitz, 1989) といった経路も考えられている。

しかし、実証研究では、アレキシサイミア傾向と攻撃性の関係については明確な関係は示されていない。(Taylor et al., 1997)。その原因として考えられるのは、アレキシサイミアという概念は、1 次元的なものではなく、いくつかの下位因子からなる複合的な概念であり、これらの下位因

子との関連で検討しなければ、明確な関係が浮かび上がってこないからだと思われる。例えば、Bagby, Taylor & Parker (1994) は、男性 22 名、女性 61 名の実験協力者に対してアレキシサイミア傾向を測定する尺度である TAS (Toronto Alexithymia Scale: Taylor, Ryan & Bagby, 1985) と 5 因子理論に基づく性格検査である NEO PI を行い、その相関を求めた。その結果、TAS の総得点と NEO PI の下位尺度である敵意とは、 -0.05 、衝動性とは -0.10 の相関しかなかった。しかし、TAS を因子分析して得た 3 つの下位因子との相関をとったところ、そのうち、externally-oriented thinking 因子との間では、敵意との間では、 -0.25 の有意な相関が見られることが示されている (ただし、衝動性との間には、 -0.17 の相関しなく、有意な相関ではなかった)。

そこで、本研究では、アレキシサイミアと攻撃性の関係について、後藤・小玉・佐々木 (1999) によるアレキシサイミアの二因子モデルを用いて、検討してみたいと思う。後藤らのモデルは、アレキシサイミア概念を、自己の体感や感情を認識し、それを言語化するプロセスの不全を示す「体感・感情の認識言語化不全」因子と、自分の感情を内省的に分析し空想や想像を行うプロセスの不全を示す「内省・空想不全」因子の独立した 2 つの因子から構成されているものととらえたものである。そして、それぞれの因子について測定する尺度である Galex (Gotow Alexithymia Questionnaire: 後藤ら, 1999) が、開発されている。

また、攻撃性を測定する尺度としては、最も一般的である Buss-Perry 攻撃性尺度の日本版を用いることにした。これは、攻撃性を、短気、敵意、身体的攻撃、言語的攻撃の 4 つの側面から測定するものである。

方 法

実験協力者 東京近郊の大学に通う大学生女子 86 名 (大学 2 年生~4 年生)。

手続き 実験協力者に、アレキシサイミア測定尺度として、アレキシサイミア傾向を 2 つの尺度によって測定する Galex を、攻撃性の測定尺度として、Buss-Perry 攻撃性尺度日本版 (安藤・蘇我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999) を実施した。回答は、すべての質問紙とも、

1) 本研究は、平成 14 年度東京家政大学文学研究科に修士論文として提出した研究の一部を加筆修正したものである。なお、本研究は、日本心理学会第 66 回大会 (広島大学) においてポスター発表された。

Table 1 アレキシサイミア傾向と攻撃性尺度の関連

Galex	Buss-Perry 攻撃性尺度 合計	Buss-Perry 攻撃性尺度の下位尺度			
		短気	敵意	身体的攻撃	言語的攻撃
アレキシサイミア合計	.196	.195	.232*	.260*	-.212*
体感・感情の認識言語化不全	.339**	.239**	.430**	.338**	-.109
内省・空想不全	-.213	-.043	-.302**	-.097	-.202

* $p < .05$, ** $p < .01$

「当てはまらない(1)」から「当てはまる(5)」までの5件法で行った。

結 果

アレキシサイミアと攻撃性との関連を検討するために、Galexの総得点、Galexのうち、「体感・感情の認識言語化不全」因子に対応する下位尺度得点、「内省・空想不全」因子に対応する下位尺度得点とBuss-Perry攻撃性尺度の合計得点と4つの下位尺度（短気・敵意・身体的攻撃・言語的攻撃）の得点との間でピアソンの積率相関係数 r を算出した。その結果をTable 1に示す。

まず、Galexの総得点とBuss-Perry攻撃性尺度の合計点の相関をみると $r = .196$ であり、有意な相関は認められなかった。これは、アレキシサイミアを1次元的なものとしてとらえた場合、攻撃性とアレキシサイミア傾向の間に相関がないということを追証したものである。

ところが、アレキシサイミア傾向の下位尺度である「体感・感情の認識言語化不全」の得点($r = .339$)は、Buss-Perry攻撃性尺度の総合点と1%水準で有意に正の相関関係にあった。Buss-Perry攻撃性尺度の下位尺度との相関についても、言語的攻撃を除く、短気、敵意、身体的攻撃の3つの尺度で、有意な正の相関となった。

これに対して、「内省・空想不全」の得点は、Buss-Perry攻撃性尺度の得点と $r = -.213$ の相関となり、これは、有意な相関ではなく、方向性に関しても予想とは逆の関係であった。また、Buss-Perry攻撃性尺度の下位尺度との相関については、敵意との相関が $r = -.302$ で有意となった。これも当初、考えられた方向性とは逆向きの相関関係である。有意差はなかったが、攻撃性尺度のすべての下位尺度との相関が予想と反対に負となった。

考 察

アレキシサイミア傾向と攻撃性には、関連があると指摘されていたが、それを実証するデータは乏しかった。本研究の結果は、アレキシサイミア傾向を構成する2つの因子のうち、「体感・感情の認識言語化不全」因子は攻撃性と正の相関を持っており、この不全が攻撃性を促進する効果を持っているのに対し、「内省・空想不全」は、攻撃性と相関がないか、あるいは負の相関を持っており、これらの不全

は、従来考えられていたのとは反対に、攻撃性と関連しないか、むしろそれを抑制する効果をもっていることを示している。従来の研究で、アレキシサイミア傾向と攻撃性の間に相関が見られなかったのは、アレキシサイミア傾向を構成する2つの因子が、攻撃性に関しては、相反する効果をもっており、その結果、その関連を打ち消しあっていたためではないか。

「内省・空想不全」と攻撃性の関連については、アレキシサイミア研究の文脈では、空想によって不快感情が解消されるといったいわばカタルシス的なモデルが考えられていた(Grotstein, 1986)。しかし、攻撃行動に関する実証研究では、じつは、空想は、カタルシスを引き起こすよりは、むしろ、攻撃性を強めたり維持したりする効果を持っていることが示されている(Hokason & Burgess, 1962)。今回の結果は、これらの実証研究の流れと一貫したものである。

ただし、本研究は、いくつかの問題点を持っている。まず、実験協力者がすべて女性であったことである。攻撃性には性差が存在することが指摘されており、それは、単に量的な問題だけでなく、質的にも異なっている可能性がある(Conner, 2002)。そこで、今回得られた結果が一般的なものかを確認するために、男性の実験協力者を用いた研究を行うことは不可欠であろう。また、アレキシサイミア傾向を質問紙などによって測定することについては批判も多く、この点についても、面接などの方法を用いて検討していくことが必要だと思われる。

引用文献

- 安藤明人・蘇我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- Bagby, R. M., Taylor, G. J., & Parker, J. D. A. 1994 The Twenty-Item Tronto Alexithymia Scale-II. Convergent discriminant, and concurrent validity. *Journal of Psychosomatic Research*, **38**, 33-40.
- Berkowitz, L. 1989 The frustration-aggression hypothesis: An examination and reformation. *Psychological Bulletin*, **106**, 59-73.
- Connor, D. F. 2002 *Aggression and antisocial behavior in chil-*

- dren and adolescents*. New York: Guilford.
- Fahy, T., & Eisler, I. 1993 Impulsivity and eating disorders. *British Journal of Psychiatry*, **162**, 193–197.
- 後藤和史・小玉正博・佐々木雄二 1999 アレキシサイミアは一次元的特性なのか? — 2 因子モデルアレキシサイミア質問紙の作成 筑波大学心理学研究, **21**, 163–172.
- Grotstein, J. S. 1986 The psychology of powerlessness: Disorders of self-regulation and interactional regulation as a newer paradigm for psychopathology. *Psychoanalytic Inquiry*, **6**, 93–118.
- Hokason, J. E., & Burgess, M. 1962 The effects of three types of aggression on vascular processes. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **64**, 446–449.
- Sifneos, P. E. 1996 Alexithymia: Past and present. *American Journal of Psychiatry*, **153**, 137–142.
- Taylor, G. J., Ryan, D., & Bagby, M. 1985 Toward the development of a new self-report alexithymia scale. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **44**, 191–199.
- Taylor, G. L., Bagby, R. M., & Parker, J. D. A. 1997 *Disorders of affect regulation: Alexithymia in medical and psychiatric illness*. Cambridge: Cambridge University Press. (福西勇夫・秋元倫子(訳) 1998 アレキシサイミア 星和書店)
- 2003. 7. 25 受稿, 2005. 4. 20 受理—